
桜の時

ホルヘ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜の時

【NZコード】

N4191S

【作者名】

ホルヘ

【あらすじ】

仕事も恋愛も順調にいってた成河ひとみ。

平凡な女の子で平凡な人生を歩む予定だった。

ある日友人と花見をする約束をするまでは・・・

プロローグ（前書き）

まいしへお願ひいたします

プロローグ

私はいたつて平凡な女だ。

今年で22歳になるがすでにそれもあやうい。

なぜこんな事になってしまったのか、なぜ私がこんな目にあうのか

? そればかり考えた。

そんな私の話をしようと思う。

まずは自己紹介から。

私は成河ひとみ22歳。

フリーーターで付き合つて5年になる彼氏がいる。

仕事は派遣会社に登録してぼちぼち稼いでいた。

恋愛も上手くいっていたと思つ。とゆうか上手くいっていた。

ただお酒と音楽が大好きな普通の女だった、あの日までは…

「じゃあ今度の日曜日〇〇公園ね、博も誘つておくからーうん、楽しみー！じゃあねーはーい」

携帯電話を閉じて今度の日曜日に決まつたお花見の段取りを組む。〇〇公園は今桜が満開の花見スポットだ。

毎年地元住民はそこで花見をするが、最近開発により高層マンションがかなり増えた。

人から聞く話では人口が5000人増えたとかなんとか。とゆう事は早めに行つて場所を確保しなければならない。あれだけ綺麗な桜が咲く公園は誰もが皆田をつけるだろ。と謎の地元愛を發揮しつつリダイアルを開き彼氏に電話をした。

「博？今平氣？うん、あのねー今度の日曜日なんだけど……」

彼氏の予定も空いていた。

よかつたー、とほつとする。

なぜなら今回のお花見は私を含めた女4人プラス彼氏達とゆう面子だった。これで私だけ彼氏これないと大分寂しいんですけど、なんてさつき友人と話ていた。

私と彼氏は毎週会う日は決まつていない、私も疲れている時があり、彼も疲れている時がある。

そうゆう日に会うとお互いイライラしていて大概喧嘩になつてしまふ、5年も付き合つとささいなイザコザも絶えなくなつてくる。くだらない喧嘩でもお互いムキになつて別れ話に発展してしまつ時もある。

5年経つても中身は子供のままっていうのが痛い所だが、ささいなイザコザはささいなきつかけで仲直りできてしまうものだ。お互い好き同士であればそんなものだ。

そんな事を繰り返した上での5年だ。

それでも私は彼氏が大好きで大好きで仕方がない、今だに付き合つた当初のときめきは健在だ。

好きだとゆう気持ちが溢れると何かしてあげたくて仕方がない。今日もそんな気持ちが溢れていた。

当日はお弁当を女連中で持ち寄る事になつていて

彼氏は甘い物が大好きだし、和菓子が好きだから団子でも作つてあげようと日曜日の花見の想像をしながら、彼氏の笑顔を想像しながらその日はベットに潜つた。

公園につきレジャーシートを広げる。

皆が来るまでにはまだ時間がある。

ちらほらと人が来ている、やつぱり早めにきて正解だつたなーと桜を眺めながらボーッとする。

ちらりちらりと散つていいく桜の花びらを見ながら「本当の花見つていつかう事かも……」なんて思つていた。

気がつけば空はオレンジ色になつていた。

え？ 私寝てた？ と思い時計を見ると夕方の5時を指している。

もしかして… 私やつちゃつた？ ！

と思い携帯を開くと、着信は一件もない。

自然と日付に日が行くがあの約束した日だ。間違えてない。

焦りは徐々に怒りに姿を変えた。怒りに任せ電話帳を開き友人の多香子に電話する。

プルルル… プルルル…

『 もしもし？ どしたー？ 』

「 どした？ じゃないでしょ？ … どーなつてんの？ … 何してんのよ今 」

『 … はあ？ 彼氏といふナビあんた！ 』 ひうしたの？ 』

「 はあー… 今日花見つて約束してたじやん、 杏子は？ 結里子は？ すつと待つてたんだけど？ 」

『…何言つてんの？そんな約束してないんだけビ。ちよつとほんと
ビヒツたの？』

「だーかーらー〇〇公園で花見するつて約束したじゃん、先週に！
多香子と杏子と絵里子と私と彼氏達で、つい先週約束したばつかじ
やん」

『だからしてないつて。いつの話してんの？』

「何それ、冗談きついんだけど。彼氏とうかうで花見するつて先週
の土曜日の夜話したじゃん。』

『先週の土曜日つてうちらが遊んだ日？クラブ行つた日でしょ？あ
…私酔つてそんな事言つちゃつた？』

「違うよ、電話で！てか先週私クラブなんて行つてないじゃん。も
う5年行つてないんですけど」

『は？行つたし、最近あんた毎週行つてんじゃん』

「博に怒られるから行けないの知つてんじゃん

『ちよ……ちよつと。本当大丈夫？』

「何が？」

『あんた2年前に博と別れたじゃん』

『え…えいあひ…博…？』

『てかあんたがしてる話、2年前の花見の事?』

私は携帯を耳から離し日付をよく見て見ると約束したあの日から2年経っていた。

落ち着け……とにかく落ち着け。

一体どうなってるの？

私は花見をする為に家を出たよね？ 昨日は何してた？
うん、今日の事考えながらテレビ見て博とメールしてたよね。
朝は？お弁当の支度してた。大好きなアーティストの曲を聴きながら化粧した。途中ノリノリになりすぎて踊つたりもした。
そして今お弁当は手元にある。携帯には昨日の博とのメールもある。
別れてなんかいない。

いつも通り愛を感じる文章だ。

日付は私がいた年になつてている。が、携帯が指している日付はその二年後をさしている。

9

「信じられない……」

果然としていると息を切らしながら多香子がやつてきた。
後ろには見知らぬ男。

「多香子……」ほっとしたが何故か違和感も感じた。雰囲気が違う。

「ひとみ～もうどうしちゃったのよ～」

泣きながら私の肩を撫でる彼女は確かに私の知つている多香子ではないのかもしれない。

「どうも…してないよ。で、あの人誰？」

「誰つて…私の彼氏の雅紀だよ？これも覚えてない？」

「あん時と違う…」

「…何言つちやつてんの」

そうか、私が知ってる多香子の彼は今はもう過去の人なんだよね。
悪い事した。

じうせん多羅子は私を記憶喪失だと思っていねりして

今私がタイムスリップしたとか言つたら信じてくれるだろうか？それとも精神科に連れて行かれるだろうか？

喪失のフリをした。

で、実際そういうのかな？

確かに私は2年前にいた私だ。

私たちは場所を移した。

町並みも私がいた頃とはすこじ違っていた。

工事中で通行止めだった新しい道路は昔からあった道のようだ。駄馬を走らせる。

新しいショッピングモールに入ると多香子が話をかけてきた。
オリコンした時から来てるんだけどわかる?」

「わかんない、私が覚えてんのはシヨシピンガ

「事だけだよ」そつか…と呟き何かきまずい雰囲気が流れるとき、空気を敏感に察知したのか雅紀とかいう多香子の新しい彼氏が話しかけてきた。「ひとみちゃんとは2年前の夏多香子に紹介してもらつたん

だけど、分かんないか

「ん……」じめんなさー。」といつ向く

「二ちゃんねるじゅうじゅういんだよ。な……」

カフェに入り飲み物を注文する。一人掛けのソファにそれぞれ腰掛ける。

私はずっと気になっていた事を聞いた。

「博は？なんで別れたの？」

「うん、詳しい事は分かんないわをだけど

「

私たちはあの花見のあと同棲を始めたらしい。

しばらくは順調にいっていたが、だんだん雲行きが怪しくなり始めた。

仕事と家事、と負担が多いわりに博の愛情を感じられないとぼやいていたらしい。

それでも同棲は続いていたが妊娠をきっかけに私たちの関係に亀裂が入った。

産みたい私と諦めてほしい博。今までのよくなさいな喧嘩じや済まされる事じやなく、毎日話し合っては喧嘩になっていたようだ。

私は親に猛反対を受け、彼氏にも反対され多香子に毎日泣きついでいたらしい。

だが結局は堕胎とゆう結果に。

結婚して責任をとると博は言っていたが毎日泣きながら暮らしていた私は当たり所となつた博に恨みつらみをぶつけ最初はただ聞いていた博もしばらく経つと言ひ返すようになり喧嘩が絶えず、結果別れた。

私はその事実を聞いてもピンとこなかつた。

これが自分の話？

それから私は博の事を1年間引きずっていた、戯れに誰かと付き合つては好きになれず博と比べその度まだ彼が好きな自分を認識して

いた。

「その1年間はほんと見てられないほど落ちてたよ…。」

「それ以降の1年は?」

1年とゆう日日は私に遊び余裕をもたらしたらしく、徐々にだが表に出るようになつていった。

そして毎週クラブに遊びに出るようになつたらしく、まるで昔の私のようだ。

確かに彼と付き合つ前の私は遊び呆けていた。

昼間の仕事? なにそれ? って感じで真面目に仕事もしなかつたし、むしろ仕事を遊び半分でやるよつた何より遊ぶ事が大事な子だった。それを教えてくれたのが博だった。

根っから遊び人の私と根っから真面目の彼。

釣り合うはずもなし、意見が合つ事なんて一度もなかつたがお互い惹かれた。

1年、また1年と経つ度に私は変わつていった。

変わつた時は「まさかひとみがね~」とか「革命が起きた」なんて友達にも笑われた。

でもだからこそ夢中になれた相手だったのだ。

価値観も180度違うからこそ喧嘩もあつたが、ときめきも色褪せる事がなかつた。

永遠に続くと思っていた関係はこんな形で幕を閉じた。

自ら味わう事もなく、2年前の思いを抱えたまま。

2 (後書き)

一話2000文字にじょうじゅつてます。少ない
? . . .

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4191s/>

桜の時

2011年4月22日13時31分発行